

ブラームスの《ピアノ協奏曲 1 番》

作品創作過程とパレストリーナ受容の可能性に関する考察



愛好家向けにピアノを交えて解説
西原稔 講師

テキスト/会誌46号/2018 論文全28頁 裏面参照

レクチャー 西原 稔 (JBS 顧問 桐朋学園大学教授)

2019年8月25日(日)2~4pm

駒場カフェアンサンブル 30席 会員優先〆切 8/10

京王井の頭線 駒場東大前駅下車 西口改札(下北沢方面)を出てバス通り(淡島通り)に向かう。徒歩約5分。

Tel 03-3467-6296(当日のみ)

一般・会員共通 ¥3000 学生共通 ¥2000 (当日受付精算)

会員優先のため、残席のある場合のみ一般受付予定。

残席の情報は8/10 JBS-HP 公開予定。

¥3000にはテキスト代・ドリンク代を含みます。

JBS会員はテキスト(会誌)をご持参願います。

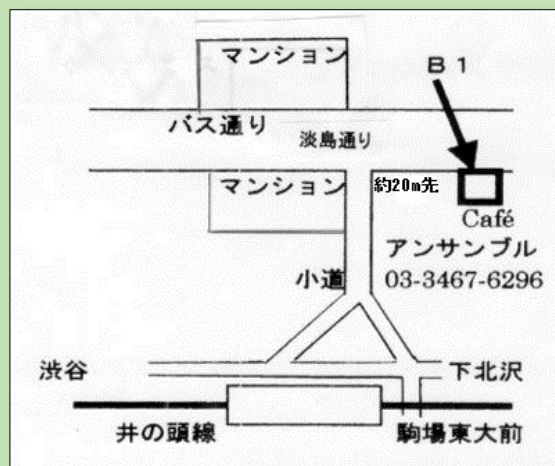
後援 ハンブルク国際ブラームス協会 米国ブラームス協会

HP <http://japan-brahms-society.org/>

お問合せ 日本ブラームス協会 (JBS)

Tel/Fax 050-3648-0002 留守電・折返

Eメール [jbs1973\(a\)jcom.home.ne.jp](mailto:jbs1973(a)jcom.home.ne.jp)



ブラームスの《ピアノ協奏曲第1番》研究
—作品の創作過程とパレストリーナ受容の可能性に関する考察—
A Study in the Piano concerto No.1 of Johannes Brahms
—Considerations on the Composing Process and the Possibility of
the Reception of Palestrina—

西原稔
Minoru Nishihara

1853年9月30日にシューマン家を訪問したブラームスは、交響曲の創作が自身のもっとも重い課題であることを深く認識することになる。ブラームスの登場に対するシューマンの驚きは、ブラームスを紹介した彼の批評記事によく示されている。そうした期待を受けて1857年から58年にかけて2曲の管弦楽作品を完成する。《セレナード第1番》(作品11)と《ピアノ協奏曲第1番》(作品15)である。これら2曲とも、ブラームスの交響曲の創作の構想を踏んでいた点でも共通性をもつ。ただし、《セレナード第1番》は、ハイドンやベートーヴェンの作品から主題を借用して作曲され、全体に古典派の音楽の受容の側面が強いのに対して、《ピアノ協奏曲第1番》は彼の独創的な創作の試みが直接的な形で表現されている点異なる。

ピアノ協奏曲という形で完成されることになったこの作品は、ブラームスのオーケストレーションの学習過程とブラームス独自の個性的な響きをきわめてストレートに表現している点で注目される。この作品は2台のピアノのためのソナタとして1854年の早い時期に成立した。このピアノ協奏曲の作曲過程におけるヨアヒムによるとくにオーケストレーションに関する指導と添削は、その後のブラームスの管弦楽作品の書法の確立においてきわめて大きな意味をもつ。二人の間の往復書簡を中心に作品の形成過程を追っていきいたい。

第1章 《ピアノ協奏曲第1番》の構想

1854年4月(おそらく9日)に、オットー・グリムがヨアヒムに宛てた書簡の中で、グリムは「ブラームスはもう2台のピアノのための3つの楽章を書き上げた。(注1)」と記しており、ブラームスはピアノ・ソナタ第3番の完成後に2台のピアノのためのソナタに着手し、早い筆で3つの楽章を完成させている。そして同じ年の6月19日、ブラームスは友人のヨーゼフ・ヨアヒム Joseph Joachim 宛の書簡で、この3楽章の2台ピアノのためのソナタをクララ・シューマンの前で演奏していることを述べている。この書簡はこのように記している。「私は私のニ短調のソナタは長く寝かしておきたい。このソナタの最初の3楽章はシューマン夫人としばしば演奏している。本当のことを言えば、私はこの2台のピアノのための作品には満足していない。(注2)」

この手紙から、この作品はおそらく4楽章の構想で作曲されたものの、3楽章までしか完成されていなかったことと、2台ピアノ用には満足していないことが読み取れる。シューマ